

複眼的な視点で 長崎と世界を捉える 報道の仕事

長崎新聞社 代表取締役社長

才木邦夫



さいきにお
長崎出身。1973年長崎
大学教育学部卒業。同
年長崎新聞社入社、編
集局配属。口加支局長、
諫早支局長、総務局総
務部長、佐世保市長
などを経て、2014年より
現職。

現場の記者を 二十六年間 目覚ましい 技術革新を体験

創始は明治二十二年。間もなく
創刊百三十年を迎える長崎新聞社。
代表取締役社長の才木邦夫さんは、
長崎大学教育学部の卒業生です。

「同期には中村法道長崎県知事
や長崎大学の片峰茂学長がいます。
それぞれ学部は違いますが、キャ
ンパスですれ違っていたのかもし
れません」。

それはすごい。当時長生だっ
た三人が、それぞれの領域で今の
長崎を牽引するリーダーになって

立っていました」。

何とも不思議な展開です。ス
ポーツで蓄えた体力も現場で生き
たことでしょう。

「しかし、最近では若い世代で記
者を志望する人が減ってきました。

いるんですね。
才木さんは長崎新聞社の中で
記者時代が長かったとお聞きし
ました。

「島原半島の口之津に四年、佐
世保に十年、諫早に四年、本社動
務を含めると二十六年間、報道部
で社会系の記者をしていました。
企業の倒産や合併、火事や災害、
殺人事件も担当していました。当
時、地方の警察には検死台がなく、
ご遺体は警察の車庫に運ばれます。
すると裏に警察署の官舎があつて、
刑事さんの奥さんが出てきてお線
香やご飯を用意してくれるので、
本当に頭が下がり、感銘を受けま
した」。

横山秀夫の警察小説のようなお

話ですね。

「取材だけでなく撮影も現像も
させられます。現像液も作るので
すが、手際が悪いから酸化して臭
くなるわ、フィルムは仕上がらな
いわ、本社から早く送れと催促は
来るわ……写真一枚に二時間かか
りました。パッと撮って現像なし
でビューッと本社に送れる機械を
誰か発明しないかなあといつも
思っていました。私たちが働いて
きた四十年で、新聞業界にとつて
も大変なスピードで技術革新が起
こりました。記者はペンからワー
プロ、そしてパソコンへ。カメラ
もアナログからデジタルへ。通信
手段もファクスからメールへ。印
刷も昔は活字を組んで十五キログ

係しており、長崎は世界とタイレ
クトにつながっています。よく
「グローバル」(グローバル+
ローカル)と言っています。世界と
長崎を複眼的な視点で捉えなが
ら報道の仕事に携わるのは、や

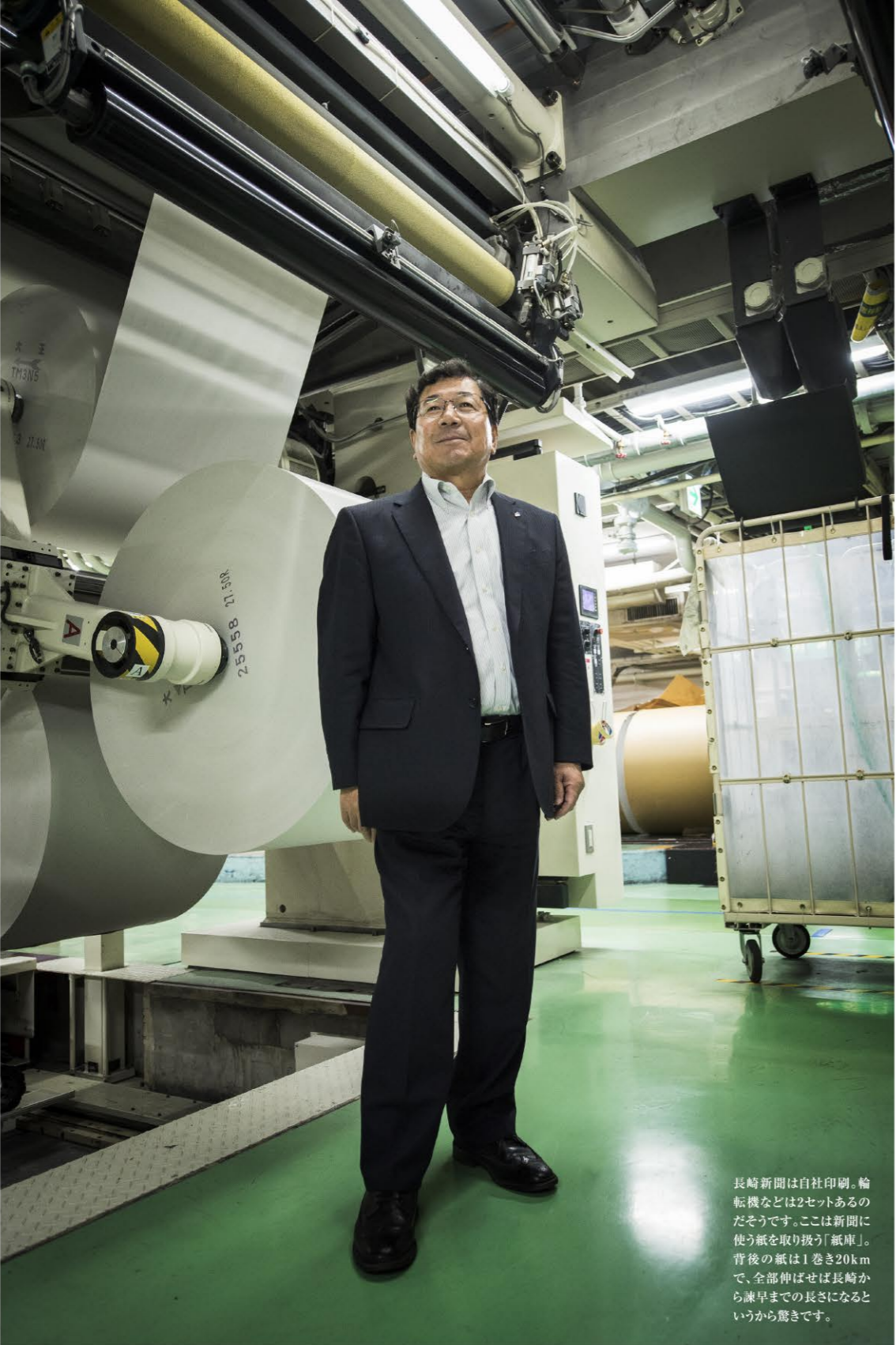
ラムの刷版を作っていました。今
ではオフセット印刷で刷版も百
五十グラム程度。あらゆる現場が
激変しましたね」。

地方紙として 目指すのは 泥臭い紙面づくり

才木さんは教育学部出身ですね。
「教育学部なのですが、実際は
バドミントン学部バドミントン学
科(笑)。とにかくサークルでバ
ドミントンばかりしていましたね。
もともと、入学した頃は語学を学
びたいという向学心に燃えていま

りがいがありますよ。例えば、私
がデスク時代に始めた「わたしの
被爆ノート」という企画は、今も
千回以上続いています。部署や担
当地域を越えて、より多くの記者
が被爆者の体験を聞き書きして連

長崎新聞は自社印刷。輪
転機などは2セットあるの
だそうです。ここは新聞に
使う紙を取り扱う「紙庫」。
背後の紙は1巻き20km
で、全部伸ばせば長崎から
諫早までの長さになると
いうから驚きです。



した。英語、フランス語、イタリ
ア語、ロシア語、ドイツ語、スベ
イン語……」

六カ国も！

「はい、はりきって六カ国語分
の辞書を買ひそろえたら力尽きて、
勉強はしませんでした(笑)。近
所にアランというハーフの男の子
がいました。仲良くなって「アラ
ン」と呼ぶと「エラン」だとい
う。アとエの間、発音記号でいう
「e」ですね。そんな言語が世の
中にあるのかと刺激を受けて、中
学校の英語教員の資格を取りまし
た。しかしその頃、サントリーの
広告が大好きでコピーライターに
なりたくて新聞社の入社試験を受
け、気が付くと記者として現場に

載しており、原爆を学ぶきっかけ
になっていきます」。

しかも全国紙と比べ、地域版が
四ページ以上も多いです。

「はい。とにかく泥臭い紙面づ
くりを目指します。例えば、人の
名前をたくさん出していきたく
い。新聞に名前が載るなんてめったに
ないことです。生まれた時に載る。
表彰されて載る。最後は死亡欄。
一生に一度は新聞に名前が載る。
そのくらい地域に徹していきたく
いですね。実は長崎は新聞発祥の地
というのをこ存じですか。一般的
には明治三年の横浜毎日新聞が日
本の第一号といわれていますが、
その印刷を担った本木昌造は、す
でに明治元年に長崎で新聞を発行
していました。その後、長崎では
弁護士第一号となる家永芳彦らが
明治二十二年に発行した「長崎新
報」が、長崎新聞の前身です。新
聞発祥の地長崎の地方紙として、
第二の出島を作るくらいの気概で
やっていたみたいです」。

大学時代、バドミントン部の男
女百人を部長としてまとめなが
ら活躍した才木さん。その体験
が今のポジションでも役立って
いるといいます。巧みな話術と
腕まくりが似合いそうな気さく
な人柄、イメージしやすい目標
を設定する能力は、リーダーに
不可欠な資質です。